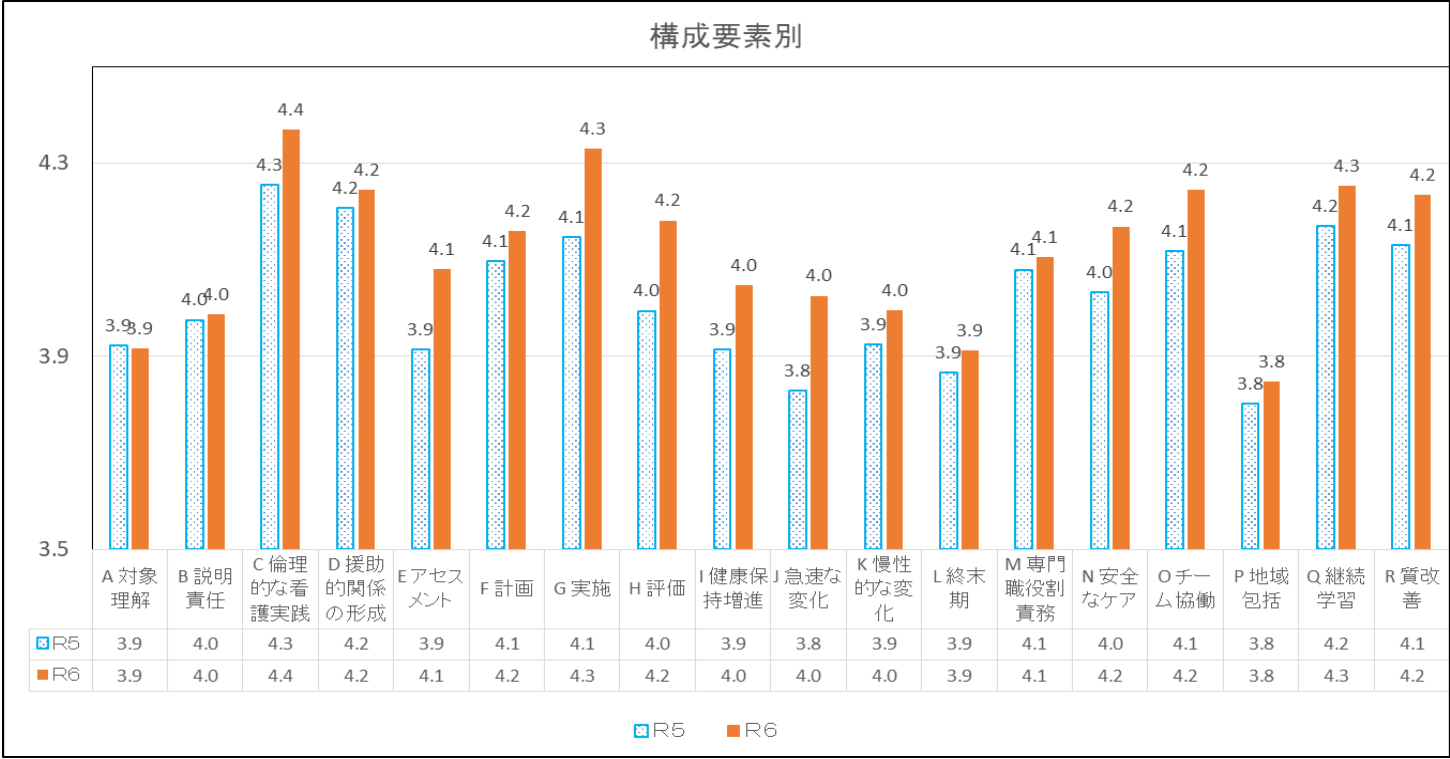
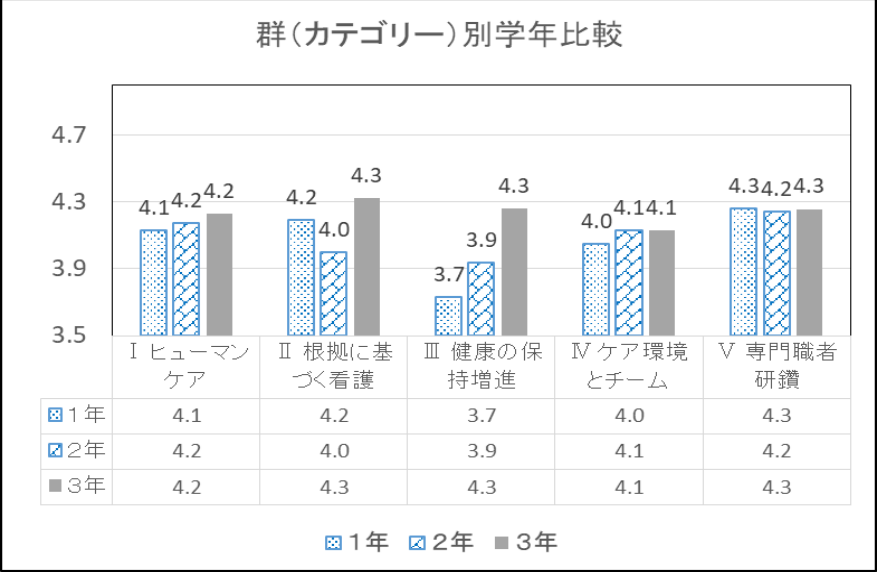
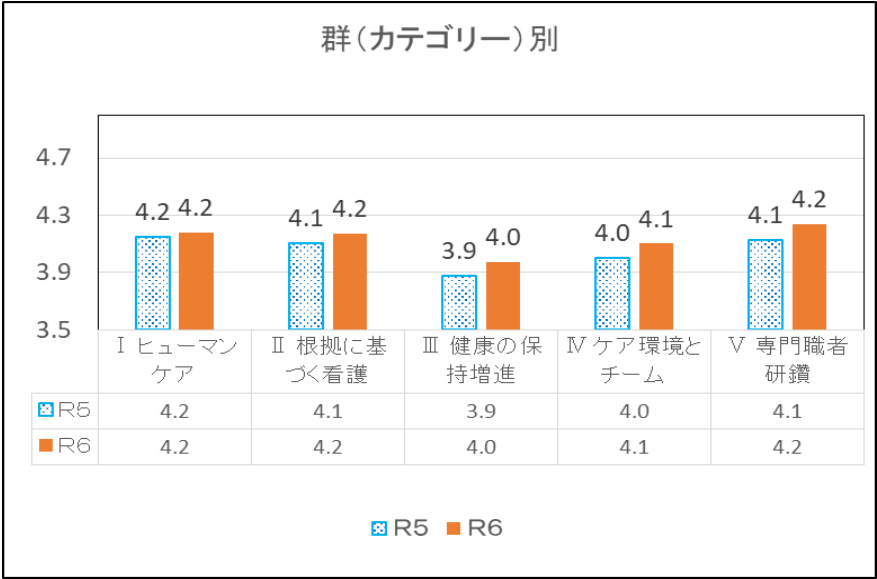


令和6年度「看護実践能力」の育成状況

群		構成要素
Ⅰ群	ヒューマンケアの基本的な能力	A.対象の理解
		B.実施する看護についての説明責任
		C.倫理的な看護実践
		D.援助的関係の形成
Ⅱ群	根拠に基づき、看護を計画的に実践する能力	E.アセスメント
		F.計画
		G.実施
		H.評価
Ⅲ群	健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復に関わる実践能力	I.健康の保持・増進、疾病の予防
		J.急速に健康状態が変化する対象への看護
		K.慢性的な変化にある対象への看護
		L.終末期にある対象への看護
Ⅳ群	ケア環境とチーム体制を理解活用する能力	M.看護専門職の役割と責務
		N.安全なケア環境の確保
		O.保健・医療・福祉チームにおける多職種との協働
		P.地域包括ケアシステムにおける看護の役割
Ⅴ群	専門職者として研鑽し続ける基本能力	Q.継続的な学習
		R.看護の質の改善に向けた活動



- 昨年度と同様に新カリキュラムの学生は旧カリキュラムの学生より自己評価が低い傾向を示していた。
- 最終学年の3年生では、平均4.3以上が旧カリキュラムの学生は40項目程度あるのに対し、新カリキュラムの学生は25項目となっていた。
- 新カリキュラム1回生の3年間をみると伸び幅はないが、年度ごとに上昇はしていた。
- 各学年、全学年合計でも平均4.0以上はあり、群(カテゴリー)別と構成要素別どちらにおいても令和6年度の方が上昇しているため、実践力自体は備わっていると評価している。
- 群(カテゴリー)ごと
- 今年度の3年生の特徴としてⅠ群の「人体の構造と機能」が下位から上位となっていたため、臨地実習での学習が良い影響となっていた可能性がある。
- 全カテゴリーで令和5年度よりも令和6年度の方が高く、学年進度と共にⅡ群以外は上昇していた。
- 2年生はⅡ群にあるアセスメントと計画の平均値が1年次・2年次と低く、看護過程の展開能力の低さがみられた。
- 構成要素別で平均4.0未満のものは「A 対象の理解」「L 終末期にある対象への看護」「P 地域包括ケアシステムにおける看護の役割」で、昨年度と同様であった。強化項目として対応していく。
- 平均の高い構成要素4.3以上は、令和5年度7項目から令和6年度12項目と増え、3.8以下は令和5年度9項目から令和6年度4項目に減っていた。平均の低い項目が減ったことが要因で全体の平均が上がっていた。